
人形ライフ

うしおなとら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人形ライフ

【NZコード】

N1138N

【作者名】

うしおなどり

【あらすじ】

こんな転生もたまにはいいかが?誰か執筆してくれたらうれしいなあ。

『のほほん』が上手く書けないストレス発散、ネタはあるのに文章が上手くいかない!!

「ハーハツハツハツハツハツハ――！」

闇夜に響く高笑い。

何が楽しいのかわからんが、そいつは酷く楽しげだ。

「ひつ怯むなアアアア――！」

「押しかえせ！正義は我らに在りだ――！」

そんなどいつ……なんて言つたら怒られるか。
我が偉大なる御主人様は必死になつて向かい来る人垣、そこに対し
て冷徹なる一撃を放つ。

ぶつぶつと、高速で紡がれていく祝詞。

言葉は方向を指示し、導かれた力は集まり暴力へと変貌する。

カツ！と目を見開き手をかざす。

刹那放たれる闇と氷の嵐は空間を食り、血眼になつて築き上げた障
壁を紙切れのように破り捨ててゆく。

重装備の男は削り取られ、軽装の男は弾け飛ぶ。

嵐は尚も進みゆく。

紅い雨を纏つたそれは集束されていた身体を次第に解放し、拡散す
る。

急激に射程域を伸ばしたそれに対応しきれなかつた者たちは、氷と
闇の矢に身を貫かれる。

「！」の程度か！…噂に名高い魔法界の騎士どもは……「」の程度か！…

「…」

ハイになつてゐねえ。

金色の髪をたなびかせ、声高らかに叫ぶ御主人。

目の前の奴らのレベルの低さに嘆いてゐるのか、どこか苛立ちが垣間見える。

まあ自称最強の魔法使いな御主人にとつちやあ最強と銘打たれたやつらが弱かつたんじやあ苛立つか。

プライド、高いかんなあ。

「ほう、あれは……？」

「舐めるなバケモノ！」この鬼神兵の前に……ひれ伏せ……

うわうわうわうわ、なんか来ちゃつたよ。

でつかー、高層ビルくらいあるんじやねえの？

アレ？名前あつてたつけ？

とにかくデカイなあ。

天高くそびえ立つとはこのこと、とでも言わん大きさ。

光る巨体に長い手足、スラリとどこか不釣り合いなその姿。

「ハハッ！あのが光る化け物の正体か……面白い」

ニヤリと口元を歪める御主人。

心底樂しそうに、彼女は嘲るように笑う。

どこか童女を思わせるその姿。

いまや楽しそうなおもむかを見つけてはしゃぐふたりを見える。

もつ本当に幼子のようだ。

「おに貴様ら、アレを少しの間止めろ」

こちらを一瞥して、言い放った御主人。
それは命令ですか? なら了解です。

「ケケケ、シヨータイムツテヤツダナ」

隣の同僚、もとい恋人? いやいや奥さんもまたとても楽しそうだ。

綺麗な翡翠の髪、同色の瞳は凶暴な色に塗りつぶされて。
べつとりと血糊のついた身の丈を超える鉈と、身の丈ほどのナイフ
を片手にケタケタ笑う。

不意にグイッと身体を引き寄せられて、唇と唇が触れ合つ。
触れ合うだけの簡単なもの。
だが何となく満足がいかない。

「ツテ舐メンナ!」

「癖でなあ

嫌がつてる風でもないよう。
どうせならもうちょっと……。

「イチヤつくなら帰つてからにしむ」

「ケケケ、テメエニ旦那ガイネエカラツテ嫉妬力！！」

「ええい黙つてろ！！」

からかいを凍てつくような視線で返した御主人。ケタケタ笑う奥さんを見れば、それが今までと変わらぬいつもの事とわかつてしまつ。

「帰ツタラ続キシコウゼ」

「おーし、じやあ俺頑張つてみる」

魅力的な提案に握る拳に力を込める。

右手に持つのは超重量の巨大な戦斧、左手に装着したのは手首から上を覆う獣のような爪。

御主人から送られてきた魔力を元にその切つ先は鋭く伸びている。

「ヒヤツハアアアアアー！」

「行きま～す」

蝙蝠の羽を背中から生やし、陣風のよつに空を翔ける奥さん。

ツルツルの脚から鉤爪を生やし、暴風のよつに地を駆ける自分。

「撃ち落とせニニニニ！！」

空をゆく奥さん目掛けて放たれる魔力の弾丸。

けどそれは彼女を躊躇わせることも出来ず、一刀の下に切り裂かれ四散する。

「邪魔……ダゼッ！」

幕に跨り接近する相手方を次々と物言わぬ肉塊に変え、縦横無尽に彼女は行く。

「コノ『チャチャゼロ』様ヲ止メレルヤツハイネエノカ！……」

今まさに、ゼロは空で一番だった。

だったら自分も、地で一番になつて見せよう。

「トマホオオオオク……ブウウウウメラアアアアアアアアアンツツツ……！」

前の御主人が叫んでいたみたいに、吼える。

あつたならば血管がはち切れそうになる声量とともに、右手の戦斧を投げつけた。

投擲されたそれは触れるものを圧し切り、進む。開いた穴へと、自分は突っ込んでいく。

目の前に見えた巨人の脚、それを爪で切り裂く。思つていたより容易に行われたそれにより、巨人は大きくバランスを崩して行つた。

「馬鹿な……！」

何か叫ぶ男の声。

それを耳に突き上げるよつに再び右手を振るつ。
三本の軌跡が、巨人の脚に描かれた。

「サスガ俺ノ男ダゼ！！」

喜々とした声で叫ぶゼロ。

グルグルと回転しながら彼女は巨人の腹に近づき、粉碎機のよつに二つの刃でミンチを作り上げた。

倒れかけの巨人。

それを足場に飛び上がり、弧を描くよつに戻つてきた戦斧を掴み、振り下ろす。

巨人の頭は真つ二つに切り裂かれた。

「準備完了だ！……つて終わつてゐるではないか！！」

不満そうな声の御主人。

「……いい、喰らつとけとりあえず……『おわるせかい』」

瞬間あたり一面を氷が埋め尽くした。

「なんか、不満だな」

ぶつくさ文句を言いつつ空から舞い降りて来た御主人。

叫んでいた人間は今や物言わぬ氷像。

カツチカツチのその中で、驚愕の表情を浮かべている。

「……帰るか」

そんな言葉とともに、自分たちは家へと歩みを進めたのだった。

「ああ、メンテは必要だからとりあえず取れ、お前ら」

「アイサー」

「了解です」

御主人の言葉とともに手を、足を、頭を外していく自分たち。

「ケケケ」

「じるじる自分と同じく首だけになつたゼロが目の前で転がっている。

「さすが私の最高傑作どもだなーー！」

再び高笑いする御主人。

魔法の糸が通される身体を、ぼんやりと眺める自分だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1138n/>

人形ライフ

2010年10月12日05時09分発行